

目的 中年世代は定年退職後の親を持ち老親扶養が現実的な問題となっているとともに、将来の自分自身の老後生活についても考え始めており、今後の高齢社会において家族が果たす扶養・介護機能のゆくえを決定する **Key-Generation** として注目される。本研究では、都市化、高齢化が進行している地方都市に居住する中年世代の有配偶女性が、どのような老親扶養や老後生活に関する意識、希望をもっているかを明らかにする。

方法 静岡市に居住する 40 歳から 55 歳の有配偶女性 1000 人を調査対象者として郵送調査を実施した。有効回収率は 41.5 %、分析対象者数は 415 人である。

結果 対象者の 4 分の 1 が自分の親または夫の親の介護経験をもっており、約 6 割が親の扶養や介護を自分自身に直接関わる問題として認識している。そして、夫の親よりも本人の親への介護意欲が高く、社会福祉サービスを積極的に利用しようと考えている。

一方、老親扶養や相続に関する意識では、老親の経済的扶養や介護負担は兄弟姉妹全員で分担すべき、長男の優先相続には反対であり「老親に対する同居や介護の貢献度」を考慮して親の資産の相続方法を定めるべき、夫の親の介護を嫁としての義務とは考えない、老親と同居には生活分離が必要であるなどを支持する者が優位を占めている。

さらに、自分自身の老後生活では息子同居よりも娘同居、子どもとの生活分離と経済的自立、在宅で社会福祉サービスを利用して自分が夫を介護することを希望するが、自分自身は介護が必要になったら施設又は病院に入所・入院すると答える者が高率である。